漁況海況予報事業浅海定線調査
(要　　約)

尾坂　康・永峰　文洋・浅加　信雄
中島　真固・浜田　勝雄・鈴木　勝男

この調査は、陸奥湾内の海況の特徴や変化を把握し、湾内漁業および増養殖業のための予報や健全な発展に資することを目的として、昭和47年度から国庫補助を得て実施しているものである。その詳細については脚註の資料に報告済みであるのでこれを参照されたい。

調　査　方　法

調査地点……6定点

調査水深……0、5、10、20、30、40、50mおよび底層

調査項目……水温、塩分、水色、透明度、卵稚魚、PH、プランクトン、気象、海底土の強熱減量粒度組成、全硫化物

調　査　結　果

(1) 最高水温は8月上旬の表層で21℃から23℃が観測され、この時期の水温較差は表層と底層で4.3℃から7.4℃となっている。最低水温は2月～3月に観測され、西湾で5℃から6℃、東湾で3℃から4℃が観測された。

(2) 塩分濃度は5月、6月に融雪水の流入の影響を受けて低塩分で32.6～33.2‰の値を示した。9月から2月にかけて徐々に塩分濃度は高くなり、最高34.2～34.3‰を示した。

(3) 透明度は7月に30m、9月に20mを越して全搬的に高い傾向を示した。

(4) 卵、稚魚　　査定中

(5) PH(表層水)は、8.2から8.4の範囲内にあった。

(6) プランクトン沈澱量は、5月の夜光虫の発生と8月以降の植物プランクトンの発生時期で高い傾向を示した。

(7) 海底土の強熱減量は、5.2～14.9%の範囲内にあった。

(8) 海底土の粒度組成は、殆んどが泥質で含泥率が高かった。

(9) 海底土の全硫化物は、0.05～0.86mg/gの範囲内であり、含泥率と密接な相関関係があった。

◇

詳細については、「漁況海況予報事業浅海定線調査、青森県水産増殖センター　昭和50年3月」に報告済み。